

仙崎の想い出

宮崎チズ

(会員・佐伯市中村北町)

胸はずませ、車の人となった。西野浦の仙崎行きです。番匠の大橋を渡り、茶屋か鼻橋を通り抜け木立に出ました。左路は浦代です。舗装された右路を辿ると、間も無く山路にかゝる。木洩れ陽さす中を螺旋をえがきながら快適に車は走る。櫃の紅葉が目にしみる。山の中腹に完成したばかりのトンネルをくぐりぬけると畑の浦です。

波静かな内海の潮の香が、車窓の透き間から流れ込む。朝日のまぶしさ、海岸線を幾度も曲りながら、目的地の西の浦に着きました。

先生二人に、生徒四人という恵まれた山登りです。軽四輪の通れそうな、なだらかな登り口、右手にみかんの色濃く染まる景色を眺めながらの足どりははずむ。頂上に近づくほどに、絶景が開け、遙か沖から運ばれて来る潮の香が山の香と調和する。そんな自然の中で、みんなのほゝは、元氣いっぱい上気している。重たくなった足

をひきずりながらも、「山はいいなあ!!」と空を仰ぎ、つぶやく。山本先生に聞かされていた、絶景の開けて来る瞬間を間近かに、胸の鼓動を覚える。山頂に立ち、先づ目に映った光景に、一瞬何も言葉が出ませんでした。汗ばみ、つかれた体に一呼吸入れるのみ。想像していたこの風景を本当に、この目で見たのです。

!!百八十度空漠の世界

何も無い、たゞ空と海だけ!!

山路を登った賑やかさも静まって、水平線の無い洋上に、吸い込まれて行く私たちです。神秘漂う雄大にして、漠とした海に向って何思う。飽きずに眺めているうちに祈りたくなるような清らかさが、私の心をひき締める。頂上は枯れた草原が広がり、小春日和の暖かさ、鳥の鳴く声も無く、無の世界にふさわしい草原に、秋の陽ざしがいっぱい漂う。風の無い海面は穏やかです。大型タン

カーが木の葉のように見える。全速力で走っているらしいタンカーの動きは、全く私たちの目にはとまらない。

静止していると思つたタンカーも、見えない水平線上に消えてしまった。漠とした洋上に思はず羽ばたいてみたくなる。独歩の書いた「春の鳥」に出て来る少年のように、自然は私たちの心を動かす。

まもなく太陽が西の海を銀色に染めながら西へと、傾いてゆく。無の世界に感動し、何かを求めてみたが、何も生れて来なかった。無の世界に心ひかれ、感動し、幾日か過ぎた或る日、私の心の奥底に眠っていた、幻想にも似た影二つ、不思議と鮮明に浮んで来た。

「緋の筒袖と、赤い花柄の元緑袖のふくよかな、綿入れ姿の私と弟の幼き日の姿が庭に広げたござの上になんぞ座っている。」

追憶

母さん町へ

天びんかついで

野菜うり

私ら二人は

お留守ばん

仲よく並んだ

ござの上

しびれきらして

待っている

母さん土産

なんだろう

うしろの籠に

ごろごろ

まりとこま

毬が高く上ったとき

こまがくるくる

まわったら

母さんっこり

笑ってた

昭和五十二年秋

中央婦人学級より

待望の風景に感動

して記す

五十三年三月、歩こう会で二回目の仙崎行きです。素晴らしかった山頂の秋の眺めを思い出しながら、春の趣も又いいのでは、と思い参加してみました。ところが頂上は椿の群生も、自然の雑草木もすっかり無くなって広い土肌が拡がり、涼を楽しんだ松の木も嵐に会ったのか、枝はちぎれ無残な姿になっていました。胸はずませて来た山頂のたゞずまいに、迫り来る観光の波をわびしく受け止めながら、下山いたしました。

今年四月十六日、つつじの見頃ということで三度目の仙崎ゆきでした。



富沢畑野浦史談会長さんをはじめ、役員の方々が多忙な時期にもかかわらず、快よく私達一行を迎えて下さり、共に学び、楽しませていただいた一日でした。雑草木の中に埋もれていたつつじが陽の目に会って春を讃え、詩情豊かにみんなの心を和らげてくれました。地域のみなさん方の御苦労に熱い思いに浸りながら、冷たいジュースのおもてなしに生気をとりもどし、楽しい見学コース

をたどりまして。自然をバツクに群生しているつつじの鮮かさが目に泌みる。

ジツフの崎の仙
雑木林を下った所に住居跡の石のつまれたのを幾つも見、つわの群生に、みんなは喜々とし

て摘みとる。Hさんは一人樁の紅花を拾ってはひもに通して楽しげです。地域の御婦人さん達の明るい健康そうな表情に迎えられ、心温められ、役員さん方の親切さに古きよきものに触れた楽しい一日でした。又の日をたのしみに、みなさんありがとうございます。

バスの発車の際、富沢会長さん、小野役員さんの見送って下さった姿を窓越しに気づいた時は、アツと思うまに過ぎてしまいました。厚い好意がジーンと胸いっぱい広がって参りました。

心こめて、もう一度「有難うございました」

